写真の可能性を追求する

―写真で何をするか、何ができるか―

写真家　夏生 かれん

カメラが高級品だった時代はいつのことでしょう。

日本にカメラが最初に持ち込まれたのは一八四三年のこと。医療の道具として、武士や貴族、お金持ちの肖像を残すものとして、写真が使われてきました。最初は限られた人たちの「記録」としての文化です。機材はもちろん輸入品ですし、撮影技術そのものが特殊なものでしたから、写真館などの特別な場所で撮影されていました。

その後、撮影に使用されるカメラもフィルムもまだまだ高価なものでしたが、徐々に写真は一般の人が自分で「撮る」ものになっていきます。一九六〇年代後半から七〇年代にはモノクロフィルムからカラーフィルムが主流になり、一眼レフカメラを持つアマチュアカメラマンも増えていきました。

そして二十一世紀に入ってからはデジタルカメラが普及し始めます。現在は、携帯電話にもカメラが付き、撮った写真をすぐにインターネット上で共有できる時代です。

写真は〝プロの技術が必要なもの〟から、今や〝誰でも撮れるもの〟へと変わりました。しかも、少々ピントが甘くなったり、ぶれたりしている写真でもコンピュータ上でレタッチ（修正）できてしまう。私たちプロがその仕事をおびやかされることも少なくありません。

今、写真はひとつの転機を迎えています。誰でもシャッターを押せば撮れる。ならばその写真でどんな表現をするのかが問われているのです。

写真という表現方法の最大の特徴は、その写実性の高さにあります。目前にある視覚的三次元情報をほぼ忠実に二次元情報へと置き換えてくれるので、「事実を像に閉じこめた」という、ある一定の満足感を与えてくれます。しかし、その写実性が高すぎるがゆえに写し込めない事実を産むという矛盾をはらんでいるのです。

たとえば、旅先で撮った写真を見た時に、「あれ？こんな感じだったっけ？」と違和感を覚えることがあります。詳細な情報が詰め込まれている写真からは、その光景の記憶は呼び起こせても、その時の感覚までは思い起こせない。情報量が多いほどにその傾向は強まります。むしろその風景を思い出すほんの小さなきっかけ、例えば旅先で観たコンサートの半券や電車の切符などの方が、その時の空気感や匂いや音のような目に見えない部分まで色鮮やかに思い出させてくれることもあるでしょう。情報が足りないからこそ想像する。その想像力が空気感をも呼び覚ましてくれるのです。

私は、作品としての撮影は、今でも主にフィルムカメラを使っています。そしてそれ

をスキャンしてデータ化し、修正を加えています。また、写真用の印画紙ではない紙をその都度選んでプリントすることもしばしばあります。それは、写実性の高いデジタルカメラではなく個性のあるフィルムを使うこと、さらに修正を加えることや、敢えて細部までしっかり描き出せない紙にプリントすることで、意図的に情報量を調整し、〝瞬間の空気を写真の中に閉じこめること〟そしてそれを〝再現すること〟にこだわっているのです。

私の写真は時々「絵みたいですね」と言われます。描き出す写真の中に、何か懐かしいものを感じてくださるようです。写真の最大の特徴である写実性を調整することによって、逆にその再現性を高め、空気感を運ぶ写真づくりを目ざしています。これはやはり絵ではなく、瞬間を切りとる写真だからできることなのです。

もうひとつ、ライフワークとして写真の可能性を探っていることがあります。

私は、写真家になる前に、臨床心理士としての活動をしておりました。臨床心理士を志したのは九歳の頃。とあることを機に、辛い想いをしている子どもたちを理解し助けられる人になりたいと考えたからです。その後学びを深めていく中で、子どもたちを助けるためにはその親を救うことが必要条件だと気づき、虐待防止の活動を始めました。子どもをかわいく思えない親を援助することで、少しでも笑顔の子どもたちが増えたらと思ってのことでした。

時を経て写真家に転身したのは、写真で人を元気にしたいと思ったことから。写真の仕事を始めてしばらく経った頃、ふと、マタニティフォト（妊婦写真）を撮りたいと思うようになりました。妊娠七～九ヶ月頃に撮影するのですが、まあるく膨らんだおなかは幸せの象徴。親も子も、出会えるその時を待ち望んでいる相思相愛の時期に撮る写真です。

子どもがかわいく思えなくなる親たちも、最初からそうだったわけではありません。産まれてくる子を心待ちにしていた幸せな瞬間の写真を残すことで、いつか子育てに疲れた時に、その写真を見て幸せな気持ちを思い出し、もう一度がんばれるきっかけになればと考えました。撮り始めて数年後にその願いが叶ったご報告をいただいた時には、本当に嬉しかったことを覚えています。

その他にも家族写真をはじめ様々な写真を撮りますが、どれも同じ。写真はその時の想いを蘇らせるきっかけなのです。一枚の写真で誰かが元気になる喜びは、他の何ものにも代え難い喜びです。

私が写真に感じる可能性は、その時の空気感を運び、カウンセリングと同じく人を元気にすること。写真っていいなぁと最近あらためて思います。その瞬間に立ち会える限り、私はシャッターを切り続けます。

写真家

夏生（なつき） かれん

福岡県生まれ、三重県育ち。早大卒。臨床心理士としてひとの心の援助を生業としてきたが、沖縄・波照間島でのある写真家との出会いを機に、写真家に転身。世界30カ国を超える国々を旅してきた。写真と言葉を通して、人の心に響く表現を志し続けている。
現在、広告・雑誌等で活動中。
2010年5月「恋するポラロイド」（雷鳥社）出版。
2011～2012年「カメラ・ライフ」にて旅コラム連載。
2013年9月南船場Acru（大阪）、2013年11月南青山SPACEKIDS（東京）にて写真展開催予定。

夏生かれん公式ウェブサイト
http://www.karennatsuki.com/